

市立函館博物館

友の会々報

No.71

令和4年度の函館文化会『神山茂賞』を受賞された、本会副会長木村裕俊氏により
令和5年5月19日に実施された、会員発表会の要旨を下記に掲載します。

市立函館博物館友の会 会員発表会「箱館戦争の新・戦没者名簿について」 木村裕俊

(はじめに)

これまで発行されている「箱館戦争における戦没者名簿」については、著名なもので2冊あります。1冊は榎本武揚が著した『明治辰巳之役東軍戦没者過去帳』であり、もう1冊は神山茂氏の著作である『箱館戦争(戊辰己巳役)幕軍戦歿者氏名考』である。

この2冊は、同じ戦没者名簿でありながら、互いに比較検討されることはなかったようである。それは「榎本過去帳」は名簿を「位階順」に整理しているが、「神山名簿」の方は、「50音順」で整理しているため、この両者を並べて比較するには、相当の労力を必要としたからであった。今回、その両者をパーソナル・コンピューターを使って比較検討し、何がどう違っているのか調べてみた。以下はその報告である。

1. 両軍兵士の構成

榎本軍の「兵士構成」であるが、戊辰戦争が勃発してから、榎本武揚の下に集まってきた旧幕府関係の戦闘部隊が主体で、新選組・彰義隊・遊撃隊など、17の部隊が参加していた。これらの人員管理は、それぞれの部隊が個別に行っていたようであるが、全体の総人員としては、およそ3,000人といわれているが、詳細な人員数は把握していなかったようであった。こうした実態を神山氏は、榎本軍の総数が何名であったのか、明らかになっていないと、「名簿著書」の中で嘆いていた。これに対して新政府軍の方は、明治元年(1868)の「戊辰の役」の戦いに加わった各藩と箱館府の勢力は1,430人であった。新政府は各藩に対し、書面で出兵要請を出し、届け出書類により参加者を記載報告していた。そして、戦い終了後には、報告書と共に死傷者名簿も一緒に提出していたので、こちらの方がはるかに信頼性は高いといえる。その名簿によると、箱館府200名、松前藩、峠下在住隊70名、弘前隊120名、越前大野隊170名、備後福山隊700名であった。この人数は、榎本軍のおよそ半分であったのだろうと思われる。しかし、明治2年(1869)の「己巳の役」の戦いでは、前年の戦いを反省し榎本軍の2.7倍となる約8,000人を投入した。その結果、どこの戦局でも、有利に戦いを進めることが出来たのである。各藩からの新たな兵力を備えた戦力は、箱館府200名、松前藩1,684名、弘前藩2,207名、備前岡山藩541名、備後福山藩632名、長州藩781名、計8,108名であった。(明治2年、乙部上陸時)

2. 榎本軍の「戦没者過去帳」

榎本武揚が明治40年(1907)に著作したといわれる「明治辰巳之役東軍戦没者過去帳」であるが、此の榎本過去帳が出来る前に、恐らく明治の初めころにはその「原簿」となる過去帳があったものと思われる。このため、明治40年に作られた名簿は、その原簿の改訂版だったのではないかと考えている。この原簿と思われる名簿は、明治25年(1892)の土方歳三の消息を訪ねる書簡の中に『龍見戦史者の名簿』として登場するのである。そのため、明治40年より以前に、既に名簿は存在していたことにあるのである。また、明治25年の頃には、名簿が作られるようなタイミングが見当たらないことから、その名簿は戦争が終わった直後ないしは「碧血碑」が建てられた明治8年ごろには既に存在していた可能性があるのである。

さて、榎本過去帳の中身ですが、この名簿は2部制になっており、第1部は「箱館之役戦没者霊位538名」であり、第2部は「奥羽之役戦没者霊位278名」の名を列記した名簿で、両方を合わせると、816名分の名簿となっている。もう1冊が、昭和34年(1959)に、神山茂氏が著作した『箱館戦争(戊辰己巳)幕軍戦没者氏名考』で、この2冊の名簿の「戦没者数」の違いは、榎本過去帳では直接の戦いで戦死した人だけをカウントし、「神山名簿」ではそれ以外にも補強して、負傷者の死亡、捕虜後の処刑者、戦地での病死なども含めて計上しており、「榎本過去帳」より120名ほど多くなっている。今回の「新・戦没者名簿」は、「神山名簿」の範囲まで広げており、名簿別総括表を次に示します。

各種名簿	士分の者	兵卒の者	合計
榎本過去帳	366名	172名	538名
神山名簿	465名	194名	659名
新・戦没者名簿	467名	200名	667名

3. 新・戦没者名簿作製の手順

新しい戦没者名簿を作るに当たっては、位階順・五十音順のどちらからも自由に引ける、また、どんな引き方をしても同じ情報が出てくるようにしたい、という考えをもとに行いました。「新・名簿作成の手順」を以下に示します。

初めに、「榎本過去帳」のデータ538人分をエクセル(Excel)ソフトに入力し、同様に「神山名簿」の659人分のデータも入力し、合わせて1,197人分のデータを一本化してアウトプットすると、同じ整理番号と名前の人が二人ずつ出てくるので、これを一人のデータとして整理し、まとめたものです。詳細には、こまごまとした修正(調整)作業がありますが、基本的にはこれだけです。

二つの名簿を一本化した作業の中で、最も多く調整したのは、「同姓同名」や、よく似た名前の人の扱いです。同一人の場合には一人にまとめますが、同じ整理番号に複数人入っている場合には、調整が必要になります。こうしてまとめた情報から、特徴的な傾向も見えてきます。

4. 「新・戦没者名簿」に見られた特徴

「新・名簿」に見られる特徴の第1点目は、「殉難地」の多くが合わなかったということです。全調査数667件中、261件が合わない。実に40%にも当たります。これまでの名簿がこれほど合わなかったとは予想していませんでした。そのため、「殉難地」の扱いは、両論併記にしました。

第2点目は、脱走者・不明者の推定です。まず榎本軍の推定最大人数が3,500人に対し、不明者943人もまた、推定人数だということです。しかし、それでもかなり多い人数です。原因として、降伏直前の旧幕軍が籠る五稜郭に「甲鉄艦」からの艦砲射撃が命中し、兵たちが一斉に逃げ出したからだ、ともいわれます。他にも旧幕軍は、特に「己巳之役」において、負け戦さが続いたことで、戦没者の整理がきちんと出来ていなかったのではないかと思われれます。

第3点目は、「捕縛者」についての記載である。「榎本過去帳」には記載はないが、「神山名簿」には13名の記載があった。函館では、9名が戦争後に大森浜で斬首刑で処刑となり、『亀田無縁寺(別名「七重浜閻魔堂」とも言った)』に埋葬されたといわれる。

おわりに

榎本軍に関する資料は、全体に誤りや抜け落ちが多い。神山氏も指摘しているが資料間の食い違いや不確かさ、曖昧さなどがあり、今後はそうした資料の精度を上げていく必要性を感じた。榎本が明治40年に「過去帳名簿」を改定したのであれば、榎本自身もそうしたことに気づいて改定を決意したのかもしれない。

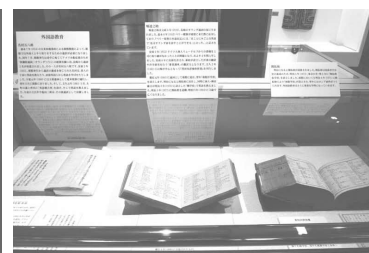
市立函館博物館企画展 「外国人が見たみなとまちHAKODATE」 見学会



企画展ポスター



企画展の観覧風景

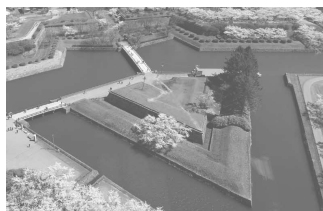


通詞名村五八郎・堀達之助 関係資料

令和5年7月21日(金)、市立函館博物館企画展「外国人が見たみなとまちHAKODATE」の見学会を開催。市立函館博物館内田彩葉学芸員に、企画展の解説・案内をしていただきました。

企画展は、第1章 ペリーの箱館来航、第2章 武田斐三郎と日本の通訳たちの外国からのまなび、第3章 ジョン・ウィルが見た箱館戦争、第4章 イザベラ・バードの北海道の旅、第5章 函館公園と函館仮博物館に関わった外国人たち、により構成されています。1854(安政元)年の日米和親条約締結により、開港した箱館には多くの外国人が訪れ、箱館の風景や街の様子などをスケッチし、手記に書き留めた資料などが残されている中で、当時の外国人が描いた風景や興味を持ったもの、手記に残された箱館戦争関係資料などを展示紹介されています。また、外国人に直接対応していた日本人通詞関係者の資料も紹介されるなど、幕末から明治期の函館を伺い知る内容となっています。

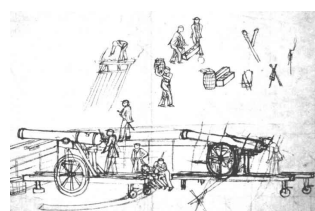
市立函館博物館友の会 会員発表会 「五稜郭・箱館戦争を検証する」



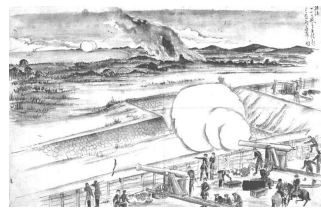
五稜郭跡 半月堡壘・水堀・本壘土塁



五稜郭内の「箱館奉行所庁舎」



箱館戦争時に設置の24斤長カノン砲



明治2年5月11日、五稜郭からの応戦

令和5年8月20日(日)、市立函館博物館講座と共催で「五稜郭と箱館戦争」の会員発表会を開催。

1854(安政元)年に箱館の開港が決定したが、上陸する外国人を応接する箱館表役所は、安全性や生活環境が不十分な状況にあったことから、安全性が高く生活環境も良好な亀田の地に、箱館奉行の役宅(五稜郭)建設を決定します。1864(元治元)年に西洋式土塁の五稜郭が完成し箱館奉行が移転しますが、直後の大政奉還で幕府が崩壊し、明治新政府へ業務が引き継がれますが、明治元年の箱館戦争勃発で、旧幕府脱走軍が箱館・五稜郭を占拠しました。このような激動の歴史を有する五稜郭と箱館奉行所の現地を巡り歩くことで、当時の出来事などを知り得ることが出来れば幸いに思います。

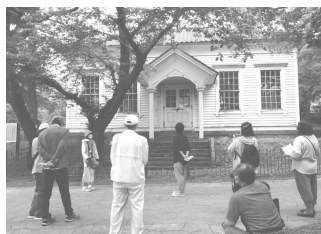
「縁ジョイ倶楽部」さんとの「函館公園散歩」



函館公園由来の碑



明治山(摺鉢山)



開拓使函館仮博物館(旧函館博物館1号)



函館県博物館第二博物館(旧函館博物館2号)

令和5年6月16日、他の市民団体との共催事業として、函館観光ボランティアガイド縁ジョイ倶楽部の案内・解説による「函館公園散策」を実施しました。散策は、函館公園由来の碑、明治山(摺鉢山)、海山奇勝の碑、石川啄木歌碑、函館公園記、箱館通宝銭座跡碑、任所適、開拓使函館仮博物館(旧函館博物館1号)、函館県博物館第二博物館(旧函館博物館2号)、ハーバー遭難記念碑、ひょうたん池、北海池、旧市立函館図書館など、函館公園に所在する数多くの建築・構造物を巡り歩き、改めて函館公園の歴史の深さを知ることができました。

令和5年度の主な事業（報告）**1. 友の会会報の発行**

- (1) 友の会会報 第71号（令和6年3月31日発行）

2. 例会・講座等の開催

- (1) 市立函館博物館友の会総会 令和5年4月21日（金）

- (2) 市立函館博物館企画展の見学会 令和5年7月21日（金）

テーマ「外国人が見たみなとまちHAKODATE」

解説者 市立函館博物館 学芸員 内田彩葉 氏

(3) 会員発表会

- ① テーマ：「箱館戦争の新・戦没者名簿について」

発表者：木村裕俊

日時：令和5年5月19日（金） 市立函館博物館集会室

- ② テーマ：「五稜郭・箱館戦争を検証する」

発表者：田原良信

日時：令和5年8月20日（日） 特別史跡五稜郭跡・箱館奉行所

※ [市立函館博物館講座:五稜郭探求～五稜郭・箱館戦争を検証する]との共催

(4) 他の市民団体との共催

「縁ジョイ倶楽部」さんとの「函館公園散策」

日時：令和5年6月16日（金）

(5) 例会の実施

日時：8月18日・10月28日・11月22日・12月13日・1月17日・2月17日

3. 博物館事業の後援・協力

- ・市立函館博物館で開催の企画展等の後援

4. 刊行物の頒布等

- ・ガイドブック「函館の文化財」
- ・函館の絵はがき

5. 総合博物館将来構想などの研究

- ・上記の例会の場を生かし、博物館構想を検討した。令和5年10月以降の例会については、ホームページ上に掲載をしている。

6. 会員数（令和6年3月31日現在） 54会員

一般会員 47名

企業会員 7社